

Vol. 140

CONTENTS

- 【コラム】 諸外国の情報教育から見た我が国初等中等情報教育の現在…和田 勉
 【解説】 note 連載「教科『情報』の入学試験問題って?」のまとめ…中野 由章・角田 博保
 【解説】 教員免許状更新講習に代わる「情報科教員研修」の実施…高岡 詠子



COLUMN

諸外国の情報教育から見た 我が国初等中等情報教育の現在



我が国の初等中等情報教育は、いま、大きな動きの中にある。中でも高校の共通教科情報科においては、2科目から選択必修だったのが「情報Ⅰ」の必修となった。これからは高校生は必ず、プログラミングなど情報の科学的理解を含むこの科目を学ぶことになる。さらに、大学入学共通テストで「情報Ⅰ」の試験が実施されること、国立大学への受験生は原則としてその受験が課されることもすでに決まった。2003年に共通教科情報科が発足して以来の大きな動きであり大きな前進であると捉えたい。

本号のぺた語義にもこの動きの一環についてとりあげた記事が2件掲載されている。1つは、本会情報入試委員会が中心になって、共通テスト「情報Ⅰ」の試作問題／サンプル問題やすでに20年来出題が続けられてきた共通テストと旧・センター試験の「情報関係基礎」の過去問題などを、会誌（note：教科「情報」の入学試験問題って?）上で解説していることが報告されている。またもう1つ、新たな学習指導要領のもとでの「情報Ⅰ」や「情報Ⅱ」をこれから担当される高等学校の先生方を主対象に、本会が2022年度に行った高等学校情報科教員研修に関して報告されている。後者の高等学校情報科教員研修では、私も「海外事情」の講座を担当した。以下はその中でも一部述べたことである。

私は2006年に韓国に半年間滞在し同国の初等中等情報教育に関して研究する機会を得た。その期間中、同国の国会内で行われた会議を傍聴する機会があった。そこでは、同国で情報教育を強化する必要性が危機感を持って語られ、同国国会議員の方々も登壇して同分野に関心を持つ政治家の立場からの射た発言をしておられた。そこには「情報教育は当然、国の将来の基盤として非常に重要なものであり、国政を担う者として当然重視し関心を持つべき対象である」という共通認識が見て取れ、当時の日本の国レベルの熱量との大きな「温度差」を感じた¹⁾。繰り返すがこれは17年前の2006年のことである。

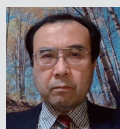
その後、中国（大陸）、台湾、スリランカ、ベトナム、シンガポール、ニュージーランドなどで、教育現場や各政府の教育担当部局で調査をする機会を得た。もちろん重点の置き方や国ごとの事情は異なるものの「国の将来に向けて情報教育は重要」ということ自体は、わざわざ主張する必要もない当然のこととして認識していることをどこでも共通して感じた。

冒頭に記したように、いま我が国では、共通教科情報科をはじめ初等中等情報教育に関して大きな前進の最中である。もちろん望ましいことである半面、自分が1990年代に高等学校情報科発足に向けての本会「試作教科書」の執筆編集にかかわったときからこの分野に携わってきた25年間、およびその間に諸外国で見えてきた情報教育に対する姿勢を思えば、これでも大きく遅れている、本当は20年前にこれが実現しているべきだった、との思いも禁じ得ない。

もちろん過去は変え得ない。できることは、これでもまだ大きく遅れているのだということ認識し、「国の将来に向けて情報教育は重要」という認識に立って、初等中等情報教育を含む情報教育をあらゆる側面から充実させ、情報社会を担う若い世代をそだててゆくことである。

参考文献

- 1) 和田 勉：日韓の情報教育の比較—初等中等情報教育に関して—日・韓 情報教育 비교—초・중등 정보교육에 관하여—, 情報教育シンポジウム SSS2006 (Aug. 2006).



和田 勉（長野大学 教職課程高等学校情報科）（正会員） wadaben@acm.org

長野大学教職課程高校情報科非常勤講師（元教授）。2006年大韓民国高麗大学師範学部コンピュータ教育学科招聘教授。本会情報処理教育委員会初等中等教育委員会・情報入試委員会・一般情報教育委員会等委員。本会シニア会員、学会活動貢献賞受賞。

LOGOTYPE DESIGN...Megumi Nakata, ILLUSTRATION&PAGE LAYOUT DESIGN...Miyu Kuno